

小說研究十六講

木村毅著

木村 毅 (きむら き)
明治文化研究会会長
早稲田大学百年史編集委員
文学博士
神戸松蔭女子学院大学教授



©1980
KOBUNSHA

小説研究十六講

(新装版)

定価 一、八〇〇円

一九八〇年七月三十一日 第一版第一刷発行

著者 木村 毅

発行者 池田 恒雄

発行所 株式会社 恒文社

東京都千代田区神田錦町三十三

電話 〇三―二九一―七九〇一

振替 東京五一三五八二四

印刷 共同印刷

製本 共同印刷

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

1091—007049—2273

葉脈探究の人

——木村毅氏と私——

松 本 清 張

昭和二十九年の暮に、九州小倉から東京に転居した私が、文通もなく面識もない文学上の大先輩を最初に訪問した先が木村毅氏であった。三十年の春だった。氏は当時から練馬区桜台の現在の家に住んでいた。私は田舎者なので紹介状をもらう人も知らず、訪問の前に電話で先方の承諾を得るといふ心得もなかった。

玄関先には氏が直接に出られた。前に見た写真と違わない顔で、やはりイガ栗頭の丸頭だった。その写真とは氏が昭和の初めに日本フェビアン協会の代表か何かの資格でイギリスに行ったときのスナップで、それを雑誌で見っていた。それから三十年近く経っているのに氏の顔はそれほど老けてはいなかった。

氏は二年前に私が芥川賞をもらったことなどは知っていなかった。もっとも現在の受賞作家とはちがいが、そのころはほやほやの芥川賞作家など世間はもとより文壇でも（交際の多い人は別として）あまり留意されてなかった。

本棚の一部がはみ出している応接間に通され、藤椅子にかけてむかい合い、三十分も話したかどうか。私は若いときに読んだ氏の「小説研究十六講」に感銘したので、ぜひお目にかかりたかったと述べ、その内容にすこしふれた。これは熟読玩味したことを著者に知ってもらいたかったからである。

氏は、ああそう、と答える程度で、多くを云われず、ぶっきらぼうな調子だった。氏は、いきなり飛びこんできた男にとまどったようだった。いろいろ話してもらえるかと期待した訪問の結果がそんなことだったので、私はちょっと失望したものの、すぐに充実感をとり戻した。会いたかった人に会えたよろこびがあった。

「小説研究十六講」を買ったのは昭和二、三年ごろだったと思う。私の持っているのは十三版で大正十四年十二月発行である。初版がその年の一月だから、一年間に十三版を重ねた当時のベストセラーだ。私は高等小学校を出てすぐにある会社の給仕になっていたが、時間を見つけてはこれに読み耽^{かか}った。たとえば銀行にお使いに行きそこで待たされている間もこれを開いた。自転車で使いに走りまわるのに、五百ページの本は少々重くて厄介だったが、これを読むのがそのときのただ一つの愉しみだった。

それまで私は小説はよく読んでいるほうだったが、漫然とした読み方であった。小説を解剖し、整理し、理論づけ、多くの作品を博く引いて立証し、創作の方法や文章論を尽したこの本に、私は眼を洗われた心地となり、それからは、小説の読みかたが一変した。いふなれば分析的になった。

《青雲の志に燃ゆる青少年達には、恰も明治の初年、何人もが華かな政界の馳驅を夢みたと同じやうに、小説の創作と言ふことが共通に胸に抱かるる野心となり、憧憬となり、希望となり、一つのロマンチズムとなつてゐると言つても過言でなからう。組織立つた科学的な小説の研究書を求むる声の、昨今にして漸く吾等の耳に入るは、かうした社会的背景を控ふるが故である。私のこの著述は、さうした熾烈な要求に應ずべく、余りに粗笨であり、余りに貧弱である。併しなから少くとも形態の調うたる上から言へば『小説神髓』以後初めての組織的研究書として自負することが許されるであらう。』(序文より)

引用がやや長くなつたが、青少年たちの「青雲の志」を「小説創作の野心・憧憬・希望」に當てたところに、若い層の一部の風潮をあらわしてゐた。それは「投書家」出身の木村氏の情熱であり、そのころの私の中にもあつた一半の気持でもあつた。

そのころの私がこの書で最も教えられたのは、十六講中の第七講「プロットの研究」、第九講「背景の進化とその哲学的意義」、第十講「視点及び基調の解剖」、第十一講「力点の芸術的職能」である。これら項目の名を見ても、その科学的な分析が察せられよう。明治十八年に出た坪内逍遙の啓蒙的な「小説神髓」から四十年を隔てて、ここにはじめて近代的小説作法と小説鑑賞の理論書を得たのである。その引用には十九世紀末までの東西古今の代表作をえらぶなどとして、私には世界文学史の概観を教えられる思ひであつた。

高遠な概念的文学理論も欠かせないが、必要なのは小説作法の技術的展開である。本書にはこれが十分に盛り込まれてゐた。後に川端康成の「小説作法」がこれを下敷にしたといわれているのも

うなずけることである。ついでにいえば、近ごろの文芸時評に技術批判がほとんど見られない。私は三十三歳のころまで乏しい蔵書を何度か古本屋に売ったことはあるが、この本だけは手放せず、敗色濃厚な戦局で兵隊にとられたときも、家の者にかたく保存を云いつけて、無事に還ったときの再会をたのしみにしたものだった。今も手垢にまみれたその本が私の書架にある。

昭和三十五年秋に朝日新聞から「一冊の本」というシリーズの第一回を私に当てられたとき、躊躇なく「小説研究十六講」をえらんだ（掲載は同年十一月二日付朝刊）。近刊の氏の「私の文学回顧録」を読むと、私が「一冊の本」の取材のために突然、初めて氏のお宅を訪問したように書かれているが、これは氏の思い違いで、じっさいは上に述べたとおりである。

それはそれとして、氏がこの回顧録（氏はその上梓の日を見ずに逝かれた）の中で、私のためにかなりページを割かれたのは恐縮のほかはない（私はこの稿を書く途中で「回顧録をとりよせて読んだ」とくに、その中で朝日新聞の短い拙文が氏を「よろこばせ、自信をつけ、再生の思いをさせた」とあるのをはじめて見て、光栄でもあり、汗顔の思いである。「再生の思い」と木村氏が書いているのは、氏が当時東京都参与をしていて文壇から離れていた時期だからだ。というよりもそれより前に氏は文壇の外にわざと移っていたため、雑誌などに名前が出ることも少く、いくら寂しい思いであったのであろう。氏の文壇関係の知友も次々と亡くなっていた。

「一冊の本」の拙文が役に立ったとは決して思わないが、期を同じくしてそれ以後の氏は文芸雑誌の座談会にもよく出られ、また新しい著書も次々と出て、とくに明治文学や比較文学の世界では氏が第一人者であるとの再認識を世間に与えたのである。

序

坪内逍遙博士が青年時の著作『小説神髓』は、後によく燦爛たる明治大正の文運を導き出すの端緒となった。思うに渺たる一巻の小説論にして、ただに小説壇ないしは文芸界方面のみに留まらず、広く一般文化の開発にまで貢献したるこの書の如きは、泰西にもその例が乏しいであろう。新興日本の歴史に小説類の占むる位置は、そのように高く、かつそのように榮譽あるものである。

しかるに私は本書の著作に際し、『小説神髓』の後を継承して、この方面の研究を進めたものの絶無なることを、小説に關してはいわゆる作法書以外、組織だった研究のいっこう出ていないことを、はからずも発見して、一たびは愕然たる感を禁じ得なかつた。が退いて思えば、これには少なくとも二様の理由が考えられる。第一はフランスのアカデミーが小説を蔑視したことが永く余弊をひいて、識者がかかる研究に手を着けることを潔しとしなかつたため、しばらくの間西欧にもこの種の著作がはなはだ稀で、したがって研究と言えは何事も西洋の移入以外には一歩も出る余地なき日本に、その方面の著作の現われようがなかつたのである。第二は日本の小説作家が、直接裨益を受くる所なしとして、かかる研究を無視したことが、大いにその發達を阻害せし

めたに違いない。

思えば旧文化の光輝を過重なる負担としてあえがざるの国民は福である。彼等は新しく興るものに失当の侮蔑を与えることをしないから。小説の組織的研究にまず鋤を入れたものはドイツで、そして軌近はアメリカにおいて最も隆昌を極めている。文献によりて推測するに、彼土においては、小説の研究は大学の教科目としても立派なる地位を占め、夏期冬期の講習会(弘張大学)においては最も多くの人気を呼ぶ科目の一つとなっているようである。その講義の書冊となったものまた大いに世に行なわれ、その幾冊かは遙かに海を隔てた貧しい読書生の我等も、これを書齋に披読するの機会を得ている。

こうした欧米の機運は直ちにかつ敏感にわが国にも反映してきた。いわんやまた、国民の聡明なる、研究は研究として別個、独立の意義をもつことに永く気付かずにはいない。実際の創作に資する所少なきがゆえにこれをなげうって顧みざる者は、直接の金儲けとなんら交渉する所なしとして経済学の存在を無用視せんとする実業家と一般、頑迷の譏りを免れまい。ことに軌近は文芸が広く、深く、社会の全面に浸潤して、なかんずく小説はその数においてよくわが国全刊行書中の半ばを占め、小説をただしく鑑賞を得ざる者は完全なる社会人としての資格に欠くる者とまで思われるに到り、いかなる新聞雑誌も小説を除外しては殆ど成立し難い情勢である。そして青雲の志に燃ゆる青少年達には、あたかも明治の初年、何人もが華やかなる政界の馳駆を夢みたと同じように、小説の創作ということが共通に胸に抱かるる野心となり、憧憬となり、希望となり、一つのロマンチズムとなつていっていると云つても過言でなからう。組織立った科学的な小説の

研究書を求むる声の、昨今にして漸く我等の耳に入るは、こうした社会的背景を控うるが故である。

私のこの著述は、そうした熾烈な要求に応ずべく、余りに粗笨そほんであり、また余りに貧弱である。しかしながら少なくとも形態の調ととうたる上から言えば、『小説神髓』以後初めての組織的研究書として自負することが許されるであらう。いづれこの方面の研究の目ざましい発達は、遠からぬ将来に期待され得る。私の前著『小説の創作と鑑賞』と本書とが、そのために、いと小さき無名の捨石の一つともなれば、どんなに満足であらう。

本書の大部分を脱稿したのは去年の九月初旬から十月にかけて洛外愛宕山下清瀧の旅舎においてであり、最後の頁を書き上げたのは十二月伊豆の土肥温泉においてであった。今や書冊のなるにおよんで、客寓の追懐のすずるなるものがある。

大正十四年新春

東京府下西大久保の新居にて

木村 毅

凡例

(一) かかる性質の書に卓抜斬新なる創見を期待する読者はあるまい。読書を涉猟して博引旁証よく万遍なく小説研究に関する知識を網羅するなら、それが本書に望まれべき最上なのだが、著者は浅学にして、その任に非ざることを恥ずる。ただ小説の科学的研究は、最近の新興題目で、まだ「学」としての首尾を整えていない有様だから、少なくともわが国においては本書の出現も無意義であるまい。

(二) いま責任上、材料の出所、ないしは主として拠った参考書を明らかにしておく。第一講は大正十三年六月頃(?) フェビヤン協会の講習会で二夜に涉って講じたものを書き縮めたのである。第二講は Edmond Gosse の “Novel” (Encyclopedia Britannica 所載) に、第四講以下十五講までは Clayton Hamilton の “A Manual of the Art of Fiction” に、第十六講は Bliss Perry の “A Study of Prose-Fiction” によった。但し右の諸書はその講究自ら英米に偏すること厚きがゆえに、適宜に欧州大陸と日本の引例を加え、また私が今日まで聊か学び覚えた知識によって足らざる所には多少の補修を試みた。なお私はトルストイの芸術論から受けた感化が多いから、本書は重要な点において上記の諸典拠とはしばしば論旨を異にする。

(三) 引例の訳文は rough translation である上、私が原典を通読していないものもあるので、

思わざる誤訳が多いであろう。また将来の研究家に資しようとの老婆心から、専門語には原語を挿入しておいたが、これもまた訳語の妥当を欠くものが少なくあるまい。大方の叱正に俟つてもし再版の機会があれば訂正を期する。

(四) 日本の引例を主として明治期の文芸家に限ったのは、前著『小説の創作と鑑賞』で多く現代作家の作品に言及する所があったから、重複をおそれたためである。

(五) 柳田泉君と宮島新三郎君とが多年苦心して蒐集した全部の参考書を提供してくれたので大変助かった。藤森成吉氏と生田春月氏もまた参考書の貸与を惜しまれなかった。それから出版については最も多く加藤武雄氏と渡辺光平君とを煩わした。記して感謝の意にかえる。

■編集部より■ 本書の旧本は旧かな、旧漢字が使用されており、生前、著者の意のもとに新かな、新漢字にあらため、また、外国著者、作品名などは出来るだけ現在使われているものになおしました。

小説研究十六講目次

葉脈探究の人——木村毅氏と私——

松本清張

序

第一講 小説と現代生活

- (一) 小説の世紀——(二) 小説は研究の価値ありや——(三) 小説を毒視する日本——(四) 統計上より見たる小説——(五) 十九世紀以後の代表的文芸——(六) 小説発生の社会的意義——(七) ロングの明断——(八) ハドソンの見解——(九) リチャードスンについて——(一〇) 人生における効用

目次

第二講 西洋小説発達史

41

21

5

- (一) 古代の物語
- (二) イタリア
- (三) フランス
- (四) イギリス(上)
- (五) イギリス(下)
- (六) スペイン
- (七) ドイツ
- (八) ロシア、ポーランド、北歐諸国
- (九) アメリカ

第三講 東洋小説発達史

- 〔日本の部〕
 - (一) 初期の作品
 - (二) 源氏物語
 - (三) 軍記の勃興
 - (四) 徳川時代
 - (五) 井原西鶴
 - (六) 西鶴の没後
 - (七) 曲亭馬琴
 - (八) 馬琴以後
 - (九) 明治初期
 - (一〇) 坪内逍遙博士
 - (一一) 明治時代の小説家
- 〔支那の部〕
 - (一) 小説の語源
 - (二) 初期の小説
 - (三) 水滸伝その他
 - (四) 清時代の小説
 - (五) 短篇小説
 - (六) 印度、アラビア、ペルシア

第四講 小説の目的

- (一) 小説の目的
- (二) 小説の目的の史的的研究
- (三) その他の諸作家
- (四) 大陸作家の見解
- (五) 目的小説の出現
- (六) 科学的的人生觀の勝利
- (七) 科学派の矛盾
- (八) 科学派の功績
- (九) 事実と小説
- (一〇) 真理と事実
- (一一) 真理の探求
- (一二) 科学、哲学、芸術
- (一三) 作家の資質
- (一四) 小説は蒸溜したる人生

- (一五)小説と実在——(一六)小説と歴史——(一七)小説と伝記——(一八)真実なる小説——(一九)虚偽なる小説——(二〇)失敗の第一例——(二一)失敗の第二例——(二二)偶然の濫用——(二三)作中人物の独立性——(二四)小説と新聞記事——(二五)法則と例外——(二六)真実味と不朽性——(二七)小説の道德、不道德——(二八)叡智の職能——(二九)叡知と技巧——(三〇)一般的経験と特殊的経験——(三一)外延的経験と内包的経験——(三二)体験の人——(三三)好奇心と同情

第五講 リアリズムとロマンティシズム

- (一)真理を現わす二様式——(二)読者の嗜好にも兩派あり——(三)第一の定義——(四)区別の第二——(五)区別の第三——(六)ブリス・ペリ教授の消極的定義——(七)材料と方法との混同——(八)科学的発見と芸術的表現——(九)ホーソンの言葉——(一〇)哲学的公式——(一一)帰納法と演繹法——(一二)現実派の帰納法——(一三)浪漫派の演繹法——(一四)リアリズムの発生——(一五)リアリズムの長所——(一六)ロマンティシズムの長所——(一七)リアリズムの制限——(一八)ロマンスの自由——(一九)兩派の優劣——(二〇)リアリズムの濫用——(二一)ロマンスの濫用

第六講 小説の基礎

- (一) 題材から手法へ
- (二) 論証体
- (三) 註釈体
- (四) 描写体
- (五) 物語体
- (六) 系列と継続の差異
- (七) 芸術は系統的なるを要す
- (八) 物語的意識
- (九) 物語の歎び
- (一〇) 物語的意識なき作家
- (一一) 物語意識の習得
- (一二) 「事件」の真意義
- (一三) 小説家の職能
- (一四) 行為(事件) 小説
- (一五) 性格小説
- (一六) 概括

153

14

第七講 プロットの研究

- (一) スティーンヴンスンの言葉
- (二) 統一
- (三) 一定の目的点
- (四) 解剖的結構と総合的結構
- (五) 結構の意義
- (六) 小説の基本様式
- (七) 積極的事件と消極的事件
- (八) ビカレストク式
- (九) プロットの定義
- (一〇) 網状式プロット
- (一一) 大契点と小契点
- (一二) 起首、中樞、終結
- (一三) 副プロット
- (一四) 散漫体と緊縮体
- (一五) 物語の分量
- (一六) 物語の起首
- (一七) 論理的発展と時間的順序
- (一八) *nouement* と *dénouement*
- (一九) 人物の役割

179

第八講 人物・性格・心理

199